



Title	メディアに見るシンガーマシン裁縫女学院とその周辺
Author(s)	池田, 仁美
Citation	デザイン理論. 2014, 63, p. 108-109
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56326
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

メディアに見るシンガーミシン裁縫女学院とその周辺

池田仁美／武庫川女子大学大学院博士後期課程

はじめに

1900（明治33）年、日本に進出した米国シンガーミシン社は、日本でのミシン販売を進めるにあたって、洋服とミシン裁縫を普及させる必要があった。そのため、教育機関として有楽町にシンガーミシン裁縫女学院（以下裁縫女学院と称す）が設立された。1906（明治39）年、私立学校設立願が受理され、校長は秦利舞子であった。

本研究に並列して、最初期の裁縫女学院に学んだ人物の遺品ⁱの「裁縫ノート」を分析しつつあるⁱⁱが、本稿では、裁縫女学院における指導内容が、現在の洋裁指導の手順や教材選択の方法の源流となるのではないかという仮説を元に、メディアを資料として裁縫女学院の概要と指導内容に関する調査を行った。調査に用いた主な資料は、「読売新聞」、「朝日新聞」、「婦女新聞」、「婦人画報」である。

名称と所在地

裁縫女学院は、年代によってその名称と所在地が変わった。調査の結果、私立学校設立願が受理される以前の1904（明治37）年7月、神田区表神保町に最初期の“シンガーミシン裁縫女学院”が設立されたことがわかった。1906（明治39）年には有楽町1丁目5番地に場所を移し以降、継続してこの地にあった。しかし、1910（明治43）年9月に「朝日新聞」及び「婦女新聞」に閉院予告広告が掲載され、同年12月に裁縫女学院は閉院する。閉院の理由として、裁縫女学院以外にも全国の高等女学校や裁縫女学校において機械裁縫教育が行えるようになってきたこと、シンガー

ミシン社が直接女教師を養成し、全国に派遣する計画があることが挙げられた。その後、1912（大正元）年から1915（大正4）年の間、同住所地において“シンガーミシン裁縫刺繍院”の名で生徒募集広告が出された。さらに、1916（大正5）年以降は、シンガーミシン社の社内機関としての要素を強め、1925（大正14）年まで継続して“シンガー裁縫院”の名称が用いられた。

裁縫女学院の概要

裁縫女学院の1907（明治40）年2月の卒業生は、普通科69名、高等科25名で、同年3月には269名が在籍していた。同年7月には新たに新築された大校舎が落成し、校舎が2棟になる。増築に伴って定員も増加し、同年9月2日の学校案内による定員は1000名、寄宿舎定員は120名となった。しかし、その後生徒数は減少し、1910（明治43）年の時点で200余名程度になり、裁縫女学院は閉院する。閉院後、シンガー裁縫院と名称を新たにしてからは、各メディアへの生徒募集広告の掲載頻度が高くなり、ミシン刺繍の指導所の代表とされるまでになった。『文化服装学院四十年のあゆみ』（大沼淳、1963）によると、1921（大正10）年の時点では生徒5～600名を収容していたが、その指導内容はミシン刺繍を主とし、洋服を縫うことはほとんど行われていなかった。同年8月、「新しい時代に適応した婦人服、子供服の専修科を設けました」という生徒募集広告が掲載され始める。この科は、後の文化服装学院の創始者である並木伊三郎がシンガー裁縫院内に設けた洋服

科にあたる。1922（大正11）年6月、並木伊三郎はシンガー裁縫院から独立し、文化裁縫学院を設立した。

指導科目群

裁縫女学院には、いくつかの指導内容をまとめた科目群が存在し、普通科、高等科、研究科に分かれて、習得する技能の難易度を段階的に上げながら、組織的に指導が行われていた。各科は3ヶ月～6ヶ月の修業で、月謝は1円～1円50銭であった。指導内容は、ミシン裁縫及びミシン刺繍を軸にして、それ以外にも編物、造花など、技芸要素を含んだ科が併設されていた。但し、“シンガーミシン裁縫女学院”にあった「家政・技芸系」の科目は、“シンガー裁縫院”では含まれない。

指導に用いられた教材

普通科の指導内容には、基礎的なミシンの使用法と、男子シャツ、男女児服の裁方及び縫方の他、製図の指導がある。高等科では、外衣や婦人服が含まれる。研究科では、通常、仕立屋に出すような礼服に至るまで、多種多様な服種の指導があった。初心者を対象とした普通科において、男子シャツが初歩の教材として用いられたことに注目できる。

夏期講習会

1906（明治39）年、8月1日から27日間、各組60名の2組で第一回夏期講習会が開講された。各教材を実物大で縫製する指導内容で、ここでも男子シャツの裁縫を初期に学ぶ。

シンガーミシン社による無料出張教授

ミシン裁縫を学ぶ手段として、裁縫女学院以外に、シンガーミシン社によるミシンの購入特典とした無料出張教授があり、購入者が自宅で無料で指導を受けることができた。出

張教授は第1回～11回までの教程が組まれており、指導内容はミシンの技術指導に終わらず、種々の和洋服の作り方にまで及んだ。指導は、裁縫女学院の卒業生があたったことから、裁縫女学院の指導内容を踏襲するものであったと考えられる。

「婦人画報」に掲載されたミシンの販売広告

「婦人画報」には、1910（明治43）年12月から1913（大正2）年5月までの期間、ミシンの販売広告が23件掲載された。広告には、ミシンの購入を勧誘させる広告文が語り口調で書かれている。広告文の文言を分類整理したところ、ミシンの魅力に関する文言が多く、縫う機械としてのみならず、それ以上に、所持する事自体がステイタスシンボルになるようなイメージをかきたてる販売戦略があった。

おわりに

メディアを資料とした調査から、初期の裁縫女学院では、ミシン裁縫とミシン刺繍を軸に、家政・技芸的な要素を含む内容の指導もされており、総合的な女子教育の場であったことが窺える。1915（大正4）年からは名称をシンガー裁縫院とし、シンガーミシン社の社内機関となった。ミシンを用いた洋裁教育は、段階的に難易度を上げながら指導され、男子シャツは基礎教程の教材として用いられた。さらに、並木伊三郎が指導に携わった経緯から、裁縫女学院には、文化式の洋裁教育法の源流も含まれるのではないかと考えられる。

- i 横川公子：明治期における一女性の技芸修業——故山口ツル氏の遺品、袋物標本とその型紙を通して——，武庫川女子大紀要（人文・社会科学），57，135-146，2009
- ii 池田仁美・横川公子共著：初期のシンガーミシン裁縫女学院における洋服型紙，生活環境学研究 No. 1，pp. 22-29，2013